

「神客人（かみまらうと）」から「門客人（かとまらうと）」へ

——山岸公墓氏による『梁塵秘抄』二七〇歌の本文の読み訂正の提起を受けて——

永池健二

本誌前号(第四一、二〇一八年三月)に掲載された山岸公墓氏の「書評」永池健二編『梁塵秘抄詳解 神分編』は、膨大な量の注釈本文を労を厭わず細部まで丁寧に読み解き、その意義と問題点とを広い視野から的確に指摘した優れた批評であつた。^① その評における指摘の数々は、『梁塵秘抄』研究者だけでなく、秘抄歌をその時代の人びとの信仰や生活を伝える資料として愛読する様々な分野の研究者にとつても、多大な示唆と刺激に満ちたものであつたが、その中でも特筆すべきは、秘抄巻二・四句神歌神分編二七〇歌「一品聖靈吉備津宮」の歌に見える「かみまらうと(神客人)」の本文の読みを「かとまらうと(門客人)」と訂正すべき新しい解を提示されたことであろう。その新解は、明治四十四年における『梁塵秘抄』巻第二写本の発見以来の本文テキストの改編を迫るだけでなく、神分編神歌が内包している歌の世界を支える信仰世界の理解をも大きく前進させる、きわめて重要な指摘であつた。本稿では、そうした山岸氏の指摘を正面から受けと

め、『梁塵秘抄』研究の立場からその新解の正当性と研究史上の意義とを整理して論述し、書評本の編者であり、当該注釈執筆担当者でもある責の一端を果たささせて頂きたいと思う。

1

当該神歌二七〇歌の影印と校訂本文は、次のようなものである。


一品聖靈うか しみや新宮本宮うち乃みや
もやこさこさくもやこれみのくさうとこさ
ごうみさきはあ西宮ーや

北や南の神客人
良御先はおそろしや
(2)

右歌第三句の傍線部の一句は、佐佐木信綱の『梁塵秘抄』（大正元年、明治書院）以来「かみまらう」と読まれ、その後「神客人」の漢字が宛てられて、『梁塵秘抄』本文として定着してきたものである。山岸氏の指摘は、原本写本の変体仮名の「三」の「み」としての訓みを、「と」の誤写である可能性を踏まえて、「かとまらうと（門客人）」と訓み改めるべきではないか、とするものである。

その根拠は、第一に「ミ」と訓まれてきた原本写本仮名の「ミ」字の誤写の可能性であり、第二に、「神客人」の語が日本国語大辞典などの主要国語辞書にも登録されず、その用例が確認できない語であるのに対して、「門客人（かともらうと）」の語は美術史研究（神像・仏像史研究）の立場から、諸社の神門の隨身・守門神像の像内銘記などに、その存在が複数確認され、中世における「門客人」信仰の存在とその拡がりを確認できることである。

当該影印本文「くしやうし」は、佐佐木信綱以来すべて変体仮名の「可三末良宇止」と判読され、「かみまらう」と読まれ、「まらう」とには、以後、小西甚一氏の『梁塵秘抄考』を始めたとして「客人」の漢字を宛て、以後諸注、揃つてその解を受け継いで定着してきた。写本「し」の字は、すぐ上の第二句にも

類例があり、漢字「三」の草仮名で、「ミヽヽヽ」と訓まれるべきものであるが、一方、山岸氏の指摘通り、「と」の誤字である可能性も十分に考えられるものである。「止」を字母とする仮名「と」の第二画の筆がかすれ消えてしまう例も、（とゝめて）、「よゝづゐど」（よみひと）など散見され、後世の書写者がそうした「と」の表記を「ミ」と誤り読んで「三」の仮名に誤写した可能性も十分に考えられるのである。

さらに、そうした想定を裏付けているのは、「かみまらうと（神客人）」の用例が、まだ確認されていないのに対して、「かまとらうと（門客人）」の例は、時代は降るものの幾つもの確かな用例が確認できることである。「客人」「客人神」「客人社」などの用例は少なからず見られるが、「神客人（かみまらうと）」の用例は、管見の限りでは、まだ見出すことができない。それに対して山岸氏は、「門客人」の語が、日本国語大辞典に見出しとして採られており、その用例として、『本朝諸社一覧』（一六八七）に「門客人（カドマラウド）」とあるのを指摘して、さらに、美術史研究の立場から次の三例の神像資料の存在を提示する。

①岡山・木山神社神門の阿形・吽形二体一對の神像⁽³⁾

② 応保二年（二一六二）在銘の岡山・高野神社隨身像（二体一対）^{（4）}

③元亨二年（一二三二）同三年（一二三三） 在銘の愛媛・大山祇神社守門神像（四体二対）^⑤

山岸氏によれば、①木山神社神門の二体の神像の中、阿形像の首柄内面の墨書銘には「門客人二尊 工人四口小路 大仏（師）定祐之作 応永三年 四月 日」と記されているという。この阿形像が「左手で弓を握り右手で弓を引いて像の左に矢を放つ勢いを示し」、対となる呟形像が「左腕を片肌脱ぎにしながら弓を下し右手で矢を下向きに番えて弓構えの様を示す」のは②の高野神社二体一对の「隨身」像と「図像的に一致しており」、高野神社の隨身像も、「門客人」の尊名こそ銘記されていないものの、①木山神社の神門の阿形呟形神像と「同一尊格」であり、「同一尊名」である蓋然性が大きいと指摘する。③の大山祇神社守門神像（四体二対）の中、「南方天像像内の当初銘記に「守門神」と記され、西方天像像内納入の永祿一三年（一五七〇）修復銘札に「門客人」、西方天像内の無年記の墨書に「門客人」・「かとまらうと」と明記されているという。

中世初頭から末期にかけて、山陽、瀬戸内海地方の大社の神門には、「守門神」の神像が祀られ、それが「門客人」と表記され、「かとまらうと」と呼ばれていた事実が明確に認められるのである。山岸氏が指摘するように、『梁塵秘抄』巻二、二七〇歌の神歌が歌われていた平安末期には、吉備津神社の南北の神門——今日の「隨身門」——には、「門客人（かとまらうと）神像が安置され

ていた」か、あるいは、「像はなくとも神域の結界を守る門客人神が勧請されていた」可能性は、きわめて高いのである。秘抄二七〇歌本文の「可三末良宇止（かみまらうと）は、「三（み）」を」とに改め、「かとまらうと」とし、その漢字表記も「門客人」あるいは「門客神」と改められねばなるまい。

2

これらの資料だけからでも山岸氏の主張は動かしがたいけれども、さらに氏の説を補強するために幾つかの事実を指摘しておく。

まず第一に掲げるべきは、吉備津神社史料に見える「門客人（神）」関連の記述である。南北の両隨身門に鎮座する神が、「北門客人」「南門客人」とも呼ばれていたことは、すでに荒井源司『梁塵秘抄評釈』所引の藤井駿「来書」に見え、『詳解神分編』の「諸説」の項においても、その事実を指摘していた。また、同書の「語釈」の項には吉備津神社蔵の「備中古備津宮縁起」や「備中大吉備津宮略記」に、「北門官人二所」「南門官人二所」「南御門客神」「北御門客神」などと見え、さらに、同神社蔵の江戸中期以前のものとされる「境内絵図」の一には、南北隨身門の所に、「門客人」と記されていることも、掲げていた。これらの史料を見ていながら、先行本文翻刻や注釈に囚われて、「かとまらうと（門客人）」の誤写に思い至らなかったのは、不明というほかない。

改めて吉備津神社関連の史料を瞥見するに、なお幾つかの「門客人」「門客神」関係の記述が確認できたので、まとめて左に掲げておこう。

○備中吉備津宮縁起

北門^{マタ}官人二所 門客人也、本地薬王薬上是也、表^{マタ}折伏門

○備中吉備津宮縁起（別本）

北門^{マタ}官人二所、本地薬王薬上、表折伏門、南門^{マタ}官人二所、本地薬王薬上也、表備受門、

○備中吉備津宮御釜殿等由緒記

門客神 櫛岩窓神

豊岩窓神

○備中大吉備津宮略記

南御門客神 南北二間、東西四間余、

中田古名片岡健祭二神

北御門客神 南北二間余、東西五間、山

田日芸丸・夜目丸祭二神

○備中大吉備津宮略記

今門客神の御像を、かミ見るに、此きぬ着たまふかとミゆ、⁽⁶⁾

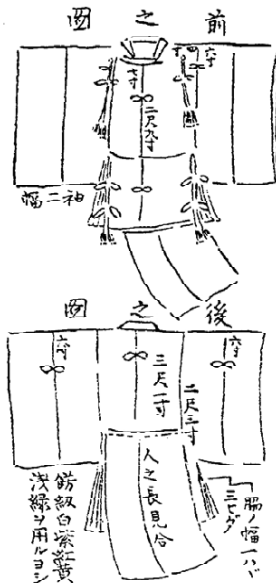
○江戸中期以前とされる吉備津神社「境内古図」

（南隨身門の右に）門客人

（北隨身門の左に）門客人⁽⁷⁾

これらの史料は、江戸時代を通じて吉備津神社の南北の神門に鎮座する神が、「門客人」あるいは「門客神」と称されていたことをはつきりと示しているよう。それが「かみまらうと」ではなく、「か」とまらうと」と訓じられていたことも、先掲、大山祇神社・守門神像西方天像像内の墨書に「かとまらうと」ともあることから、まず動くまい。

また、とりわけ興味深いのは、「備中大吉備津宮略記」に見える「今門客神の御像を、かミ見るに……」という記述である。この条は、左のような神祭用の神衣の古図とその説明の後に添えられた注記である。



色ハ浅ミとり或白ニて、きぬは何きぬともしるしなし、近きころまで大丞仕・小丞仕などいふものは、是を着けるといふ、名はかりありて、きぬはしらざりしに、近きころふるぎ文の中より此形出たり、⁽⁸⁾

即ち、近き頃、古き文の中より見出されたという神祭りに際して用いられる神衣のひな形を書き写した上で、今、門客神の御像を拝み見ると、その御衣は、右の神衣と同様のものに見える、というのである。この当時、南北の神門には、右のごとき神衣を着た「門客神」の御像が据えられていたことが確認できよう。

3

山岸氏の指摘に導かれて、諸書を尋ねると、さらに門客人信仰の大きな拡がりが見えてくる。管見の限りで、最も特筆に値するのは、次の「出雲千家家文書」に見える二つの記録である。

○出雲杵築大社仮殿造営目録（『鎌倉遺文』一一八八〇）⁽⁹⁾

注進

杵築大社仮殿造営目録日記事

一 御神殿一字

一 同御内殿一字

一 小社三宇
一 左右門客人社二宇
（中略）
右、粗注進如件、
文永十二年四月 日

○出雲杵築社正殿日記目録（同二一八八一）⁽¹⁰⁾
注進

杵築大社御正殿日記目録事

一 御神殿一字
一 同御内殿一字
一 筑紫社
一 御向社
一 雨崎社
一 左右門客人

（下略）

前者は、文永十二年（一二七五）四月の年記を持つ「御仮殿造営目録」の、後者は、同じ文永十二年のものとする「御正殿日記目録」の、いずれも冒頭部である。鎌倉の中期には出雲杵築大社の境内に左右の「門客人」二神を祀る社殿が二字、構えられていたことが窺える。両目録は、共に、ほぼ年次に従って記事が配列されているが、前者の記述のすぐ後ろには、喜録二年（一二二六）

の記事が続き、後者の後ろには、寛喜二年(一二二九)の記事が載せられている。この二つの「門客人」の記事は、梁塵秘抄神歌の時代からあまり下らない鎌倉前期には、出雲大社に左右の門客人社が祀られていた可能性をも示唆しているのである。山岸氏の指摘のように、岡山・木山神社蔵の「門客人」神像二体とまったく同様の図像と認められる同・高野神社蔵の応保二年(一一六二)の年記を持つ「隨身像二体」も、同一の尊格として「門客人」と称せられていたのではないかという推定を、裏付ける史料といえよう。

「門客人」の次で古い用例は、『源平盛衰記』礼卷第十七に、次のように見える。

或本云、嚴島大明神ハ、門客人ヲ御使ニテ白淨衣ヲ着テ參給テ、御劍暫入道ニ預給ヘト被申ト云云。¹¹⁾

福原遷都の不穏な情勢の下、怪しき夢見や託宣の打ち続く中で、源中納言雅頼に仕える侍の夢に、諸神会合して、清盛入道「朝威を背くに依て預け置きし御劍を召返し」、その「そ頸突け」と議定する場面で、清盛の帰依篤い安芸国の嚴島明神が暫く猶予を請うも成す術もなく跳ね突けられた後に添えられた一行である。嚴島神社にも、御先の神として「門客人」が祀られていたことを示す、興味深い史料である。

右の一行は、流布本では、本文にそのまま続けて書かれ、「門客

人」の語には「かどまらうど」と振り仮名が施されている。しかし、より古体を残すとされる慶長古活字版では、改行して本文より引き下げて書かれ、仮名も一切振られていない。「或本云」とするこの一文の成立を『源平盛衰記』本文の成立まで遡らせることは難しいが、古活字版成立時にすでにあった異本に拠つたものとするれば、中世後期の用例と見ることができよう。「かどまらうど」の訓みは、流布本成立時のものであるから、江戸期を遡ることはできないが、それでも「門客人」の訓みを示す貴重な用例である。

ちなみに、宮島の嚴島神社の本社本殿、拜殿、祓殿前面に海上に突き出して設けられた平舞台の海に面した正面左右には、現在も「門客神社」二社が祀られ、「左門客(ひだりまらうど)神社」

「右門客(みぎまらうど)神社」と呼ばれている。¹²⁾明らかに嚴島神社の聖域を守護する守門神の神格であることが窺えるが、この左右の門客神社に祀られる神が、『源平盛衰記』に嚴島明神の御使として白き淨衣を着て現われたという「門客人」と同神であることは、言を俟つまい。この用例は、後に見るように、門を守護する「門客人」が、同時に、大神の御使わしめとなつて働く御先(ミサキ)の神でもあったことをも示しているのである。

時代を降れば、門客人信仰はさらに大きな拡がりを見せる。高野神社や木山神社とそれほど離れていない岡山美作地方の志呂神社(御津郡建部町下神目)には、その入口に一字の神門があり、近世末期の素朴なものであるが、一對の神像二体が祀られているという。その形容が高野神社の阿形像と同じく弓を射る形を做つ

ていることから、斉藤孝は、この二像も、門客人神像であつたと推測している。¹³⁾ところが、志呂神社に伝わる元禄二年（一六八九）の年記を持つ「志呂之御宮帳」には、その末社の項に、天神、龍王に続いて「一、門客人」¹⁴⁾とあり、斉藤の推測を裏付けている。

同じ岡山備前地方の延宝三年（一六七五）の「備前国々中神社記」所載の「備中窪屋郡浅原村氏神社由来書上事」の「末社」の項には、「一、門守人、昔撞石ハ慥見ヘ不申、正体ハ本社、于今籠置申、台間半二三間」¹⁵⁾とある。「門守人」は、「門客人」と同一の神であろう。ここにもかつては、「門客人」社が祀られており、その御正体の神像は本社に今も籠め置かれていたというのである。

そのほか、埼玉県さいたま市（旧大宮市）の氷川神社には、境内摂社として左右二神の「門客人（もんきやくじん）神社」が祀られ、出雲の日御崎神社にも、摂社として東西の門客人社（かどまろうどしや）が鎮座する。中国、瀬戸内地方を中心に広く「門客人」神信仰が拡がりをを見せていたことが窺われよう。

これらの事実、平安時代末期の「梁塵秘抄」の時代、吉備津神社の南北の神門に祀られた神は、「かどまらうど」と呼ばれ、「門客人」あるいは「門客人」と表記されていたことを雄弁に物語っている。山岸氏の指摘通り、二七〇歌の従来の「かみまらうど」の読みは、やはり、「かとまらうど」と改められねばならないのである。

4

山岸氏の指摘は、梁塵秘抄二七〇歌本文の読みの訂正を迫るだけでなく、それによって、秘抄神分編神歌の背後にあつてそれらの神歌に生命を与えている民衆の信仰世界の解明に新しい光を照射した。二七〇歌の「北や南の門客人（かどまらうど）」の一句は、それ以後諸国に広く展開する、社寺の聖域を守る守門神としての「門客人」信仰の拡がりの劈頭に位置する貴重な史料として、新しい生命を得て甦つたのである。

では、「門客人」とは、そもそもどのような神であつたのか。その存在は、歴史上どこまで遡ることができるのか。

ここに、興味深い史料がある。永長二年（一〇九七）大宰権帥に任ぜられ大宰府に赴いた大江匡房（一〇四一―一一一）が康和二年（一一〇〇）八月、府を出でて安楽寺に詣でた時のことを詠んだ「参安楽寺詩」である。

康和二年秋	清涼八月時	我詣安楽寺	寺在東北陲
出府七八里	先望彼門楣	題額構金字	下乘当路岐
(中略)			
門塾安木梗	挟箭共哆囀	瞻視偏如生	跋扈勢疑々

(下略)¹⁶⁾

清涼の秋八月、太宰府を出て東北の辺りにある安樂寺に詣つた匡房は、寺門の両脇にある門楼（門塾）に「木梗」——木で造つた人形像——が安置してあるのを見る。その像は、矢を手挟み、共に口を大きく開いて、上から見下ろすようなその様はまるで生きていゝように、杵からはみ出すかのように力に溢れた勢で、じつと立っている、というのである。

門楼の両脇に安置された木像は、「共に」とあるから左右一対二体。矢を挟んで口を「哆囀」し、眼を見開いた容貌魁偉の形像は、これまで見てきた守門の隨身像——後世「矢大臣」とも呼ばれるようになる——と通じるものであり、明らかに門を守る「門守神」と見做すべきものであらう。十二世紀初頭のこの時、すでに「門客人」の呼称が成立していたかはわからないが、寺社の聖域の入口の門楼に、聖域を守護する武神の形像が祀られていたことを示している。管見の限りでは、守門神像の最も早い事例である。

この聖域の境界を守る守門神の系譜をさらに遡れば、宮中内裏の御門を守る「豊岩密神」「櫛石密神」に至らう。すでに『古事記』神代編天孫降臨の条に随従した副神として見える「天石戸別神」の別名として記されたこの両神は、「此神者御門之神也」¹⁷と記され、『古事記』編纂以前に、門神的性格を担っていたことが窺える。

この両神の名は、祈年祭の祝詞の中の「御門の御巫」の辞や「御

門祭」の祝詞の中に、内裏の御門を祀る神として見える。笹谷良造によれば、前者は、「天皇靈を祀つた神祇官齋院の門の神に仕える巫女」——御門の御巫（みかどのみかむなぎ）——のものである。後者は、「大内裏を取り巻く十四の門の神を支配する齋部の唱えるもの」である。「どんな方法で祀つたかは不明だが、小祠など無く、門の柱を当体として祀っていたらしい」¹⁸と推測している。まだ形像を持たない、この宮廷の御門の神を後世の「門客人」神と直接結び付けることには慎重でなければならぬが、境界としての門を守る門守神としての性格の源流をそこに求めることは、おおよそ認められよう。

中世から近世にかけての神道書には、また、次のような記述が見える。

○神祇拾遺

閤神

件神。或ハ門閤神ト云。或ハ善神王ト云。或隨身ト云。或門客トモ云テ。由来コト不明レバ。人々モ難心得ゾ。徒ニ過コト也。共ニ高木神ノ御子ナレバ。其寄モ尋常ナルベカラズ。神代ノ昔。天孫ヲ下奉ントシテ。左右ニ添申サル、忍日來目ノ二神ノ摸タルコト也。仍手ニ弓ヲ取り。背ニ岩韞ノ形アル。天神ノ外安置無益ノコトナルベシ。¹⁹

○諸社一覽

問閤神ハ何ノ義ゾヤ。答門守也凡千木加棟木閤神等ハ其神ニ応ジテ立ベキ事也中国ノ俗ノ是ヲ門客人ト云ヘリ衣冠ノ体黒

赤ノ色五位上ノ装束ニシテ綏ヲシ矢籠ヲ負弓矢ヲ持セタリ是
誤也ト云々仇々シク難云⁵⁰⁾

闇神（かどりのかみ）は、その姿形から「隨身」とも呼ばれ、
また「門客」、「門客人」とも呼ばれた。「門客」とは「かどまらう
ど」と訓ぜられたもので「門客人」と同一語であろう。それが「中
国の俗」から来ているという「諸社一覽」の指摘は興味深い、
それが単に言葉だけを借りてきたものか、あるいは、前掲笹谷氏
の言のように異族の神霊をもつて門を守らせたためにその名が採
用されたのかは、にわかには判断できない。
『書言字考節用集』や『倭訓栞』などの辞書類には、また次の
ような記述が見える。

闇神 カドモリノカミ 本朝神祠外門、往々設看督⁵¹⁾

長像俚俗呼為矢大臣是矣 （書言字考節用集三 神祇）

かどのをさ 看督^{カドノセ}長と書けり職原抄に見ゆ検非違使の別当に
付属する者なり○今神社に闇神として弓箭を帶せる像を設け俗に
矢大臣と呼ぶもかとの長なり⁵²⁾ （倭訓栞）

門守神——闇神——は、検非違使に附属する武官「看督長」の
形像と理解され、弓箭を帶したその姿から、「矢大臣」とも呼ばれ
たことがわかる。興味深いのは、柳田国男は、生まれ故郷の兵庫

県神崎郡田原村辻川（現 福岡市辻川）で、氏神の社・鈴の森神
社で、そうした矢を挟んだ武神の形像を日常的に眼にし、それを
「門客神」とも「矢大臣」とも呼んでいることである。

自分の生まれた在所では村の氏神と隣村の氏神と、谷川を隔
て、石合戦をなされ、あちらは眼に当つて傷つかれた故に、今
でも隣村の人は片目が小さいといったが、しかもこちらの社の
門客神、いわゆる矢大臣がまた片目を閉じた木像である。幼少
の頃からこれを不思議に思つて、今も引続いて理由を知りたい
と願つてゐる。片方の目は一文字に塞いで、他の一方は尋常に
見開いてゐるのが、二体ある像の向つて右手の年とつた方だけ
であつたやうに記憶する。今でもまだあらうから確めることは
出来る。勿論この彫刻は定まつた様式に従つたまで、特にこ
の社のみにかぎられたことではなからうが、他の実例はあの地
方ではまだ心づかぬ。⁵³⁾（『一つ目小僧その他』『目一つ五郎考』）

材料は今でもまだ集まつて来る。たとへば目一つ五郎考の中
に、郷里のうぶすなの社殿の矢大臣が、片目が糸見たやうに細
かつたといふことを書いてしまふと、それからはこの御宮に
参拝しても、きまつて門客人の木像に注意をせずにはゐられな
くなる。その木像には年を取つた赭ら顔の方の左の眼が、潰れ
てゐるのが多く、またはさうでないものもある。⁵⁴⁾

（『一つ目小僧その他』自序）

武神の形象の多くが、片目を隠った形であることに柳田が注目しているのは、一つ目の妖怪の源流を、神に捧げる生贄の片目を潰してその印とした古代の習俗に求めようとする所論と関連付けようとしているからである。矢大臣の一体が片目を隠っているのは、もちろん、左目を閉じ右目を刮目して狙いを定める弓射の姿形を表したものだから、柳田の失当は明らかだが、一方、柳田は、『石神問答』（一九一〇年）以来の著作の中で、境界神やミサキ（御先）としての「門客人」にしばしば言及し、それに「かどまらうど」とルビを添えている。柳田にとって「かどまらうど（門客人）」という言葉は、何ら特殊な用語ではなく、小さい頃から使い慣れた生活語彙であつたのである。

社寺の神門に祀られる門守神を「かみまらうど」（神客人）と称したという確実な用例が見出せない以上、秘抄二七〇歌の「可三末良宇止」はやはり、「可止末良宇止」（かとまらうと）の誤写と見做すほかあるまい。

5

山岸氏の貴重な指摘は、二七〇歌の本文の読みの訂正に留まらない。山岸氏は、門客人を平安時代後期に大きく展開した「ミサキ神」信仰と関連付け、門客人信仰の総合的な解明のために、ミサキ神信仰の全容の把握が急務だと指摘。さらには、平安時代

後期以降に見られる「仏像造立における大局的現象」——葉師の十二神将像の造立や不動明王の脇侍であり、眷属とも見做される制吒迦、矜羯羅童子の造立の盛行など——を、仏教・仏像信仰におけるミサキ神信仰の浸透・展開として相即的に把握する新しいパスベクトイブを提示された。

後者については、山岸氏を始めとする仏教図像史、仏教史研究の側からのさらなる研究成果を俟つよりほかないが、前者の門客人をミサキ神信仰の盛行と関連付けて捉える指摘が正鵠を得ていることは、前掲『源平盛衰記』巻第十七の「都遷り」の条に「嚴島大明神は、門客人を御使にて」とある一例からだけでも容易に首肯されよう。さらに、秘抄卷一、四句神歌神分編二四五歌の「神の御先の現ずるは」の神歌に「早尾よ 山長行事の 高の御子 牛の御子」²⁵と靈驗あらたかなミサキ神としての一番に歌われる「早尾（さうを）」権現が、「早尾権現トハ門守神御ス、故ニ山王ノ守リ神ニテ大鳥居等ニ向ヒ玉フ也」²⁶（厳神鈔）とされ、日吉山王の七社の神の左右を守護する守護神として「左大行事 毘沙門天王」と共に「右早尾 不動明王」として「両神威専一也」²⁷（日吉社神道秘密記）とあることなども、門客人神がミサキ神でもあつた事実を裏付けていよう。

このミサキ神信仰について、民間信仰研究の立場から早く着目し、研究の先鞭を付けたのは、柳田国男である。初期の書簡体の著作『石神問答』（一九一〇年）において、早くも「ミサキ」と称する神や社の名に着目し、その境界との関わりを指摘した²⁸柳

田は、「若宮部と雷神」（一九二七年）では、八幡の松童や北野天神の富部老松など、大神の下にあって靈威を奮って怖れられた眷属神——小神——が、またミサキとも呼ばれた事実を指摘して、「ミサキは先鋒であり又使者である。或は門客人もしくは荒脛巾、又荒エビスと称へたのも同じ神であつた」⁵⁹と述べている。その後、柳田は改めて「みさき神考」（一九五五年）を書き、神の先払い、使わしめの神としてのミサキから説き起こして、神使・眷属神としての動物ミサキや七人ミサキ、山ミサキ、川ミサキなど「非業の死を遂げて、祀り手もないような凶魂」や、荒ぶる御霊神、御子神、王子神、若宮信仰にまで説き及び、ミサキ神信仰の大きな拡がりを示して、その研究の重要性を指摘した。⁶⁰

山岸氏の「かどまらうど（門客人）」への読み替えの指摘は、神像仏像研究史の様々な事例と相俟つて、平安時代後期におけるミサキ神信仰の具体的様相に大きな光を当てることになった。『梁塵秘抄』巻二、四句神歌神分編の三十五首の神歌の数々も、そうした神仏習合の下におけるミサキ神信仰の具体相を踏まえた、解釈の再検討が求められよう。『梁塵秘抄』研究の側からの新たな研究の進展を期待したい。

注

- (1) 山岸公基「書評 永池健二編『梁塵秘抄詳解 神分編』」『奈良教育大学国文—研究と教育』第四一号、二〇一八年三月。以下山岸氏の所論の引用は、同評に拠る。

- (2) 『梁塵秘抄』巻第二は、天理大学附属図書館所蔵本である。本稿では、二七〇歌の影印と校訂本文は、筆者編『梁塵秘抄詳解 神分編』八木書店、二〇一七年、に拠った。

- (3) 山岸氏が主として拠られたのは、斉藤孝「美作二宮高野神社門客人神立像—そのイコロジーを中心に—」『美術史』八九号、一九七五年九月、及び同「神門に祀られるいわゆる「随神像」について」『柴田実先生古稀記念 日本文化論叢』、一九七六年の両論である。

- (4) 同

- (5) 『学叢』第十四号、京都国立博物館、一九九二年三月、同第十六号、一九九四年三月。

- (6) 以上の吉備津神社関係史料は、すべて『神道大系 神社編 美作・備前・備中・備後国』財団法人神道大系編纂会、一九八六年、に拠る。

- (7) 藤井駿・坂元一夫 山陽カラーシリーズ『吉備津神社』山陽新聞社、一九八〇年。

- (8) 前掲、注(6)に拠る。

- (9) 『鎌倉遺文 古文書編第十六巻』東京堂出版、一九七九年。

- (10) 同

- (11) 中世の文学『源平盛衰記三』三弥井書店、一九九一年。

- (12) 『日本建築史基礎資料集成二 社殿Ⅱ』中央公論美術出版、一九七二年。

- (13) 前掲、注(3) 斉藤論文。

し、『柳田国男全集』第三十三卷、筑摩書房、二〇〇五年に拠る。

(元本学教授)

- (14) 前掲、注(6)に拠る。
- (15) 同
- (16) 『新訂増補国史大系 本朝文粹・本朝続文粹』吉川弘文館、一九六五年。
- (17) 日本古典文学大系『古事記 祝詞』岩波書店、一九五八年
- (18) 笹谷良造「祝詞―日本文学発生論に沿うて」『まほろば』十三号、一九六九年三月。
- (19) 『続群書類従』第三輯上、続群書類従完成会、一九〇三年。
- (20) 『続々群書類従』第一輯、国書刊行会、一九〇六年。
- (21) 『和漢音釈書言字考節用集』第三卷、本屋又兵衛、一七六六年。
- (22) 『倭訓栞合本』第三、谷川士清、一九〇三年。
- (23) 柳田国男『一目小僧その他』小山書店、一九三六年。但し、『柳田国男全集』第七卷、筑摩書房、一九九八年、に拠る。
- (24) 同
- (25) 前掲、注(2)に拠る。
- (26) 『神道大系 神社篇 日吉』神道大系編纂会、一九八三年。
- (27) 同
- (28) 柳田国男『石神問答』聚精堂、一九一〇年、但し、『柳田国男全集』第一卷、一九九九年、に拠る。
- (29) 同「若宮部と雷神」『民族』第二卷第四号、一九二七年五月、後「雷神信仰の変遷―母の神と子の神」と改題して『妹の力』(創元社、一九四〇年)に収載。
- (30) 同「みさぎ神考」『日本民俗学』三卷一号、一九五五年八月、但